

【「赤松小三郎エッセイ賞」優秀賞】

赤松小三郎とわたし

竹川 紗良

(7歳、東京都世田谷区、学生)

赤松小三郎さんはおじいちゃんが好きな人だったので、かぞくといっしょにしらべてみました。

まずしらべたことをかきます。

けいおう3年(1867年)5月17日、赤松さんは、おしろのえらい人である、まつだいら春ごくさんにだいじな手紙を出しました。この手紙では、「ぎ会せいじ」をしてみようよ、とよびかけていました。

赤松さんの考えでは、「ぎ会」というばしょをつくります。

「ぎ会」はみんなにえらばれた人が国の大切なことをきめるばしょです。えらい、えらくないや、お金もち、びんぼうにかんけいなく、みんながはなしあってきめます。赤松さんは日本で、はじめてこの考えを生み出した人です。「国のだいじなことは、このぎかいできめましょう」といいました。

たとえば、どうぶつ園にえん足に行くときです。それでどのどうぶつを見たいかきめるときに、クラスの中にいる5人のとくべつな家にうまれた人だけが見たいどうぶつをきめられるようなもので、えどじだいはふこうへいだなと思いました。みんなの考えできめたほうがいいと思います。だから、ぎ会はあつたほうがいいと思います。

赤松さんは日本ではじめてぎ会をよびかけたので、びっくりしました。そしてすぐくどうどうとして、ゆう気がある人だなと思いました。むかしはぎかいがなく、わたしがそのじだいにいたら、ふこうへいだなと思いました。もしも赤松さんにあうことができたなら、「ふこうへいじゃないせかいにしてくれて、ありがとうございます」と言いたいです。